

CIEC 第 92 回研究会報告 (小中高部会企画)

テーマ：社会へつなげる学び ～問い直そうキャリア教育～

日時：2011 年 10 月 16 日(日) 13:30-16:30

会場：京都女子高等学校

参加者：19 名

■開会挨拶(北陸学院大学 辰島裕美)

キャリア教育の意味は広く、中教審の答申によれば、教科教育の中で取り組むことができる。また小中高部会の世話人の中での以前の議論の中では、キャリア教育とは日頃の教科教育の中での視点の問題であるとのことであった。今回は、香川先生に教育と職場の接続性について、伊達先生には教育で得られた能力の活用事例について問題提起をしていただき、それを元にキャリア教育について議論したい。

■「学習論の変遷と状況論・活動理論から見た学習環境：越境的な学びへ」

大正大学人間学部教育人間学科専任講師 香川秀太先生

ヴィゴツキーの「状況論」の視点からキャリア教育を考えたい。「状況論」に関しては、日本においては佐伯先生や茂呂先生、上野先生が広められた概念である。前半は状況論に関わる学習論の変遷についてお話しし、後半はいくつかの実例を元に日常的概念と科学的概念について話をします。

もともと行動主義では、プログラム学習としてスモールステップで易から難へ進め、教育者が期待する行動が表れたときにすぐにほめるという行動で学習を行っていた。その際には問題を細かな要素に分解し、チェックリストを作るという行程があった。その後の認知主義では、個人の変化に依存したメタ認知や認知主義的学習観などの研究が進められた。これらの行動主義や認知主義においては、教室内の学習と教室外(社会)の学びのズレを問うことがあまりなく、学校の成績と社会における賢さは近いものであると考えられていた。状況論的学習論では、教室や社会という状況によって、学びも異なり、評価も異なると考えている。教室内では、IRE(Initiation-Reply-Evaluation, 発問-返答-評価)の過程が多くなされるが、現実社会では IRE のようなものはあまり行われぬ。IRE は悪いものではなく、教室に特有の過程なのである。またそのため教室では問題についてリアルな状況を考慮しないことも多く、それ故問題を問い返す経験を持つことも少ない。(例：6m の小学生が 13 人いる。全部で何 m になるか。)学校でも組織においても言われたことをきちんとやる人材は必要なのである。

「兄」というものは日常的概念では理解しているが、「兄弟とは何か」という一般的定義(科学的概念)として説明を要求すると応えることが難しい。「日常的概念」とは、個人的な経験と密着しており、無意識に理解している概念であり、一方「科学的概念」とは、抽象的な定義を意識的・自覚的に扱う概念のことである。「アルキメデスの法則」とは学校で教師から明確な説明がなされているので、科学的な概念として理解しているが、それに関して問われたとき、再生は出来るが、深く考え具体的に話すことはあまりない。IRE 的なやりとりも無意識な日常的概念を科学的概念として自覚するために必要なことなのである。日常的概念にも科学的概念にも長所・短所が



ある。それらの概念間を相互に作用させることも必要である。キャリア教育においては、教室内で科学的概念を学び、実社会において日常的概念を学ぶことがある。そのとき学校は「越境の時空間」としての存在となる。教室は、現場を体験させるのではなく、職場の科学的概念を考える場でもあるのである。学校のクロズドラーニングをオープンラーニングに変える必要がある。オープンラーニングの例として、水戸市立五軒小学校での駐車場でのミニ神社について考える事例、海外でのハイブリッドな学習の事例、瀬戸市立幡山中学校でのお菓子のパッケージメーカーの職場体験の事例を紹介する。現場での参加レベルも見学のみの浅い参加、部外者として扱われる半参加、本物の実践が行える深い参加の 3 つのレベルに大別できる。教室内での「飛び込み式」の学びの例もある。数学の授業で解決に必要な基礎知識(記号)を自ら導き出させる事例もある。バクテリアの増殖に関する問題を扱い未習事項である対数記号 log と同等な記号を生徒が開発した例がある。これらのキャリア教育を行っていく際に必要な経験や課題もまだまだ多い。

■「決意としての転移：キャリアを教育するための一視点」 有限責任事業組合ビジネスリサーチラボ共同代表 大手前大学現代社会学部非常勤講師 神戸大学大学院経営学研究科博士課程 伊達洋駆先生

元々教育学が専門であったが、その後経営学に飛び込み、現在は経営の分野を研究している。

はじめに「7:2:1」とは何だろうか？リーダーに対して、リーダーシップを発揮するために重要であることを問いつけたとき、7割が「経験」、2割が「人との関わり」、1割が「研修」であるという回答を得た。研修が1割というのは少ないとも見られるが、仕事の全時間の1割も研修していないのだから、1割の効果を得たというのは成果があったといえるのではないだろうか。自分は実践的な経営を行うことを考えて、会社を立ち上げた。

ペアディスカッション 1「キャリア教育を進める上で一番大事なことは何か？」について同じテーブルの 2, 3 人で話し合いなさい。

コンテンツに関する話は今回は触れない。環境のデザインについて話をしていく。「転移論」では、知識は状況を転移すると考えていた。その後「状況論」になり、これでは、知識は状況に埋め込まれていると考えている。ここで、ふたたび「転移論」で考えてみる。転移が起きる、起きないのではなく、決意を持って「起こす」ものとして取られたらどうだろうか。それでも転移は起こりにくい。なぜだろうか。個人の問題として、「忘却」や「モチベーションの不足」などがあり、組織としては「上司が肯定的でない」、「活用の機会がない」などと言うことなどが考えられる。学校では多様な人間に画一的な内容を教えている。活用の機会がないものも多いのでは。



ペアディスカッション 2「学校教育の内容を転移させるための阻害要因と促進要因」について同じテーブルの 2, 3 人で話し合いなさい。

阻害するものや促進するものに先立って、「どこに転移するのか」、「どこで活用するのか」が問題になる。学校教育の場合、特に高校では「受験」が転移先になりやすい。学習内容がどこに転移するのかという問いは、キャリア教育

を扱う際には重要な問題である。

36社の教育担当者に定着できた研修や定着できなかった研修に関しての要因について聞いた。様々な回答があるが、研究の効果測定があまり行われていないこともわかった。学校教育では効果測定の方法が確立しているのだろうか。なぜ効果測定がなされていないのだろうか。

まとめとして、キャリア教育に対する問いかけとして、「目標は定めているか」、「その目標をクリアさせるために効果測定はしているか」、「ダメだったときにどう働きかけるか」、「そのための資源(時間や労力)の余裕があるか」という4つを挙げておく。

■ディスカッション

神戸国際大学附属高等学校 大木先生

世界史の授業の中で、産業革命以前の手工業とそれ以降の働くイメージの差について生徒に問いかけた。自分が働く上で、状況が変化すれば、様々なことが変化することを教えた。過去の歴史の中での働き方か、自分が新しく想像した働き方かを決断させる必要がある。

京都女子中学校・高等学校 平田先生

中学校1年生のお念珠作りの体験では、ただ作るだけでなく、文化の大切さや働くことについての理解をさせた。

伊丹市立伊丹高等学校
畑井先生

教科「情報」の中での活動として、2つの商店街と連携し、「いたみの育ちあい(共育)プロジェクト」を立ち上げ、地域SNSを活用している。



北陸学院大学 辰島先生

キャリア教育は、幸せな人生を送って行けるかどうかであって、効果測定は出来ない。

香川先生

社内研修はゴールが明確であるが、学校教育は異なる。効果測定をするならば、社会人基礎力としての評価も出来るが。学校教育の良さは、いつ役に立つのかわからないけれど、魅力があるからやっているものもある。すべてを効果に落とすことは出来ないのかもしれない。

早稲田大学高等学院 武沢先生

学校教育と企業研修の違いは、学校は真っ白な個体に対しての教育であり、転移先を考えない。社会人教育の転移先とは根本的に異なる。しかし学校教育の中で閉じているので、社会人教育のノウハウが欠けている。今の高校生は、ある程度社会に目が向いているので、学習内容との逆転現象が起こっている。

大木先生

高校までは、社会人とは限らず、家庭人やそのほかに育てることも視野に入れている。転移先はキャリア教育の結果を評価するものではない。もっと論理的に思考することを学ばせたい。その場合には論理的文章を書けたかどうかで効果測定出来るはず。

閉会

文責：大橋真也（千葉県立船橋啓明高等学校）